

2021年1月31日 礼拝説教

詩編講解説教46「神はわがやぐら」

詩編46：2～12、エフェソ6：10～13

詩編第46編に影響を受けた人はとても多いと言われます。宗教改革者マルチン・ルターはこの第46編からインスピレーションを受けてあのプロテスタント教会を代表する讃美歌「神はわがやぐら」(267番)を作りました。ルターが「神はわがやぐら」を作ったのは1529年と言われています。この年はオスマン帝国が神聖ローマ帝国のオーストリア領に侵攻した「ウィーン包囲」という出来事がありました。トルコ軍は街を陥落することができず撤退いたします。一方でヨーロッパ社会は宗教改革の只中にありました。ルターが信仰の戦いとオスマン帝国との戦いを重ねて見ていたということは十分考えられます。「神はわがやぐら」の勇ましさにそういう背景があるのかもしれない。

ルターの時代も、現代もいろいろな意味で戦いの連続と言うことができます。実際に戦争、紛争が起こることもあります。それ以外でも身近なところでは、最近あまり聞かれなくなりましたが一昔前は「受験戦争」という言葉がありました。「就職戦線」「企業戦士」という言葉もありました。最近ではコロナとの戦いということが言われます。コロナじゃなくても、病気と戦うということが言われます。日本人は何でも戦いにしたがる場所がある。そういうことで鼓舞する、士気を高めるということがあるのかもしれない。しかしそのように日々戦いに追われる中で、疲れを感じている人は少なくないと思います。戦ってばかりで心休まる場所がない。現代人というのは無意識のうちにもそういう戦いに自らを追い込んでいるようにも思います。聖書もまたわたしたちの士気を高めて、「頑張れ、頑張れ」と鼓舞しているのでしょうか。ルターもそういうところに共感して、あの勇ましい歌を作ったのでしょうか。

確かにこの世の生活の中でわたしたちは災害を経験したり、病気や死に直面したりいたします。このコロナ禍もそうでしょう。わたしたちはそれらと戦い、それらを克服するのでしょうか。それよりもむしろそれらを用いて、わたしたちを神さまから引き離そうとする力が働いていることを知るべきです。わたしたちが戦うべき相手はそこです。エフェソ書に「わたしたちの戦いは、血肉を相手にするものではなく、支配と権威、暗闇の世界の支配者、天にいる悪の諸霊を相手にするものなのです」(6：12)とあります。「暗闇の支配者」「悪の諸霊」とは、悪魔、罪の力のことです。ルターの讃美歌では「陰府の長」とありました。そういう誘惑する力が働く。この地上でわたしたちが真に戦うべき相手は罪です。この罪が解決しない限り、わたしたちの魂は本当の意味で安らうことはできません。わたしたちがいくらこの世の戦いを勝ち続けても、それが魂の救いにはならないのです。

罪というのは神さまを見失うことです。サタンはあらゆる手段を用いてわたしたちを神さまから離れさせようといたします。あの創世記の蛇の誘惑は人生の中で何度も襲ってきます。それは決しておとぎ話ではなく、この地上の生活の中で実際に起こるのです。病気や様々な苦難を経験するとき、「山々が揺らいで海の中に移る」「海の水が騒ぎ、沸き返り、その高ぶるさまに山々が震える」「すべての民は騒ぎ、国々は揺らぐ」そういう心境になるでしょう。世界中がこのウイルスに揺れ動いています。そこには明らかに罪の力が働いています。

この第46編は、全体を通じて世界の初めから終わりまでの歴史が示されています。それは人類の歴史であり、個々の人生の歴史と理解してもよいでしょう。「地が姿を変え、山々が揺らいで海の中に移るとも。海の水が騒ぎ、沸き返り、その高ぶるさまに山々が震えるとも」(3、4節)ここに「海」が出てきますが、これは天地創造の初めにあった混沌を示しています。「地は形なく、むなしく」(口語訳)「闇が深淵の面にあり」(創世記1:2)とあるように、罪はこの世界をそのような混沌に陥れます。けれども神さまが「光あれ」と言われ、その混沌の中に光、秩序を与えられました。神さまが共におられることで世界は混沌から救われていきました。

そして神さまの救いの御業はやがて完成へと向かいます。「主の成し遂げられることを仰ぎ見よう。主はこの地を圧倒される。地の果てまで、戦いを断ち、弓を砕き槍を折り、盾を焼き払われる。力を捨てよ。知れ、わたしは神。国々にあがめられ、この地であがめられる」(9~11節)ここに世界の最終的なことがあります。神さまがこの罪の世を圧倒され、世界は神さまとの和解に入ります。さらに「力を捨てる」というのは抵抗をやめること。これは罪が力を失うことです。造られたもの全てが神さまを礼拝する。神さまが全てになられるということです。「主の祈り」のように御心が地にも行われるのです。この世界も、わたしたちの人生もそのように初めから終わりまで神さまに導かれていきます。そのことを教会の言葉では「摂理」と呼びますが、第46編はそのような神さまの救いの計画を明らかにします。

そして忘れてはならないのが、その歴史の初めから終わりの完成までを神さまが共におられ導かれるという信仰です。そのことが2、6、8、12節に繰り返されます。この神さまが共におられる(インマヌエル)の信仰こそ、イエス・キリストによってはっきりと示された救いに他なりません。クリスマスの御言葉「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。この名は『神は我々と共におられる』という意味である」(マタイ1:23)イエス・キリストの誕生によって、神さまがこの世界を見捨てられず、どこまでも共にいてくださることがわかりました。それは十字架の死、陰府の世界にまで及ぶ救いです。それゆえにわたしたちはどのような苦難においても、神さまを見失うことなく、最後の完成を望み見ることができるのです。

この世は確かに試練、戦いの連続です。けれども「万軍の主はわたしたちと共にいます。ヤコブの神はわたしたちの砦の塔」(8、12節)そのように神さまが共におられ、常にわたしたちのやぐら、助けとなっていてくださる。イエス・キリストがそのことを証明してくださいました。その信仰から来る強さが罪に抵抗するわたしたちの本当の強さなのです。